

中國語の色彩語彙“赤”の行方

——臺灣方言の色彩語彙體系を中心に——

遠 藤 雅 裕

1. はじめに

色彩の red⁽¹⁾を指す場合、現代中國語では“紅”が用いられる。一方“赤”は、色彩よりも“赤脚”“赤貧”のように「むきだしである」「何もない」という色彩以外のことを意味する場合が多い。『現代漢語詞典』(1983年版)の“赤”の項目では、全43語の中で色彩に関連するものは17語、すなわち約4割ほどしかなく、それらも、拘束的な形態素として熟語などの中に残っている程度である。つまり、大雑把に言えば、色彩語の“赤”は、口語ではほぼ消滅してしまっているのである。しかし、かつて“赤”は五色の一つで、いわゆる基本色彩語彙 (Basic Color Term 以下 BCT: Berlin & Kay 1969) である (遠藤 1994a)。では、色彩語の“赤”は一體どこに行ってしまったのであろうか。筆者は、以前この問題について若干の見通しを立てておいたが (遠藤 1994b: 40-41)、本稿では、特に口語層の“赤”について、認知意味論的・方言地理學的な視點から、臺灣方言の色彩語彙體系を主な材料にして、“赤”の行方を考えてみたい。

2. “青”

本論に入る前に、“青”の状況について述べておきたい。なお、“青衣”“青山”などの複合語の構成成分としての“青”の指示領域は、ここでは便宜上考察の対象としない。

遠藤 1994b・1994c によって、結論から述べれば、“青”の残存は北方地域よりも南方地域で顯著である。指示領域についていうと、北方地域では、北京方言のように、“青”の積極的な指示領域はほぼ消滅しているか、black に制限される傾向が有り、またすでに BCT ではなくなっている。一方南方地域の

粵語や閩語などでは, green がその指示領域となっている。特に, 後述する臺灣方言では, “青”は BCT である。形態素の自由度⁽²⁾という点でも, 北方方言よりも南方方言の方がかなり自由である。なお, 諸方言の記述資料に見える“青”の指示領域を表1にまとめておいた。それぞれの資料で記述の基準が異なり, 有力な判断材料にはならないが, 参考として掲載しておく⁽³⁾。

【表1】 “青”の指示領域

[記號] ○；制限などの記述なし *；用例から判断
△；指示対象の制限あり（布など） ?；用例無し
▲；拘束的（偏正構造の複合語としてのみ）

	黒	緑	藍	その他	出典
内蒙赤峰	△(布)				遠藤 1994 b
北京	—	—	—		遠藤 1994 b
河北昌黎	△(布)				1984 昌黎方言志 p. 269
山東利津	▲(布)*				1990 利津方言志 p. 124
山東煙臺	▲(布)*				1982 煙臺方言報告 p. 171
山西太原	▲(布)*	▲*	▲*		1994 太原方言詞典 p. 232
山西忻州		▲*		灰藍色	1995 忻州方言詞典 p. 209
青海西寧	▲(布)*	▲*	▲*		1994 西寧方言詞典 p. 192
新疆 ウルムチ	▲(布)	▲*	▲*		1995 烏魯木齊方言詞典 p. 330
四川成都	△(布)				1995 漢語方言詞匯 (第 2 版) p. 493
四川南溪	▲(布)	△(布)			1987 李莊方言記 p. 225
雲南大關	▲(布)				1990 大關方言志 p. 214
貴州貴陽	○?	○?	○?		1994 貴陽方言詞典 p. 260
湖北武漢	○	○	○		1995 武漢方言詞典 p. 307
湖南長沙	△(布)				1995 漢語方言詞匯 (第 2 版) p. 493
湖南婁底	▲(布)*	▲*			方言 1990-3 湖南婁底方言詞匯 (三) p. 238
湖南雙峰	△(布)*				1995 漢語方言詞匯 (第 2 版) p. 493
江西南昌	▲(布)*				1995 南昌方言詞典 p. 209
江西黎川	▲(布)*	▲*	▲*		1995 黎川方言詞典 p. 164

江蘇丹陽		○?	○?		1995 丹陽方言詞典 p. 191
江蘇蘇州		○	○		1993 蘇州方言詞典 p. 224
上海崇明		▲*			1993 崇明方言詞典 p. 137
浙江景寧	○?				1992 浙江方言詞 p. 395
浙江麗水	○?				1992 浙江方言詞 p. 395
浙江平陽	○?				1992 浙江方言詞 p. 395
浙江青田	○?				1992 浙江方言詞 p. 395
浙江樂清	○?				1992 浙江方言詞 p. 395
浙江雲和	○?				1992 浙江方言詞 p. 395
浙江溫州	○?	○?	○?		1983 浙南吳語基礎語彙集 p. 694
浙江溫州	△(布)				1995 漢語方言詞匯(第2版) p. 493
福建福州	△(布)				1995 漢語方言詞匯(第2版) p. 493
福建東山	○?	○?	○?		1979 福建漢語方言基礎語彙集 p. 214
福建邵武	○?				1991 閩語研究 p. 379
福建廈門		▲*	▲*		1993 廈門方言詞典 p. 273
福建建甌	△(布)				1995 漢語方言詞匯(第2版) p. 493
臺灣		○			本稿
廣東梅州		▲*	▲*		1995 梅縣方言詞典 p. 214
廣東廣州		○			遠藤 1994 c

通時的には、次のように推定できよう。つまり、かつて“青”は、black・blue・green という、いわゆる寒色帯を包括していた BCT であった。しかし、時代が下るに従って“青”の基本レベルの指示領域は主に本来の領域の周辺部分に縮小し、背景化が進む一方、“藍”“綠”が前景化し BCT となっていく⁴⁾。換言すれば、“青”は“藍”“綠”や“黒”にとっての上位語的存在となったのである。この過程は中國語圏で同時進行したのではなく、北方地域で早くから始まっていたといえる。

また、“青”は背景化するに従って自由度が低下するが、基本レベルでの自由度が最高とすると、背景化するに従ってその自由度は低下してゆくのではな

いだろうか。つまり、意味的に基本レベルカテゴリーに属するものは、言語學
的カテゴリーでも基本レベルであるといえよう。

とすれば、“赤”についても同様の傾向があるのではないだろうか。

3. 諸方言資料に見える“赤”の痕跡

方言調査報告などは、標準語と異なる語彙だけを重點的に記述する傾向がある
ため、残念ながら體系的に色彩語彙を記述したものは多くない。しかし、こ
のような断片的な記述からも“赤”の残存の様子を窺うことができる。

まず指示領域であるが、“赤”は brown を指示していることが分かる（表
2）。このことから“赤”は“紅”の周邊部に残っていると豫想できる。

【表2】

	單語	意 味	出 典
客 家	赤色	Brownish-red colour	1926 客英大辭典 p. 11
臺 灣	赤	赭褐色	1931 台日大辭典（1987 臺灣語大辭典下卷 p. 69）
福建東山	赤色	ちやいろ（茶色） brown	1979 福建漢語方言基礎語彙集 p. 214
福建邵武	赤 ⁽⁵⁾	紅	1991 閩語研究 p. 360

次に、生活に身近な食物名で、red カテゴリーに含まれるような屬性を有す
ると考えられるものを文獻によって調査した。対象はアズキ・ニンジン・クロ
ザトウである。これらは標準語で、それぞれ“紅豆／小豆”⁽⁶⁾“紅蘿蔔／胡蘿
蔔”“紅糖／黑糖”などと表現され、red カテゴリーの BCT，“紅”が主な修
飾成分となっている偏正構造の名詞である。結果は表3にまとめておいた。
尚、表の数字は、当該の食物名が得られた調査地點の数である。ところで、ク
ロザトウの「クロ」など、辯別標識として働く色彩語彙は基礎的なものに限ら
れる（國弘 1979・鈴木 1990：24-28）⁽⁷⁾。よって、色彩語彙としての“赤”が残存
している方言では、修飾成分として“赤”を選ぶ可能性が有るという豫想を立
てることができる。

さて、アズキは、“赤”が付くものは14件で、その多くが中國大陸の東南地
域、すなわち吳語・閩語を中心とした地域に見られるが、特に上海を含む江蘇
に多い。ニンジンのは、福建省邵武方言の“赤蘿蔔”1件のみである。クロザト
ウは、“赤糖”“赤砂糖”のように“赤”が修飾成分になっているものは17件で、

これもアズキと同様の地理的分布を示している。表3の母集団が東南部地域に偏っているとはいえ、やはり“赤”の残存はこの地域に顕著であることが指摘できる。

ところで、アズキに比べて、ニンジンに“赤”が付くものが少ないのは、アズキが中國原産の在來種なのに対して、ニンジンはアジア西南部原産の外來種である點が関係しよう。すなわち、古くから中國に存在していたアズキについては、古代の BCT である“赤”を修飾成分に選ぶことができた。一方ニンジンが中國に入ってきたのは13世紀頃といわれている。そして、その時点では、多くの方言で“赤”は既に“紅”に取って替わられており、色彩語彙を修飾成分として使う場合は、必然的に“紅”が選擇されたのではないだろうか。とす

【表3】 食物名詞に見られる“赤”

(1)アズキ 中國原産。

	河北	山東	山西	河南	青海	新疆	貴州	湖北	湖南	江西	江蘇	上海	浙江	福建	臺灣	廣東	合計
赤豆	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	3	2	0	0	0	9
赤小豆	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	3
赤燒豆	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
紅赤豆	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
紅豆	0	0	0	1	0	1	0	0	1	1	1	0	1	4	0	2	12
紅小豆	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
紅飯豆	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1

(注) 香港は廣東に含む

(2)ニンジン アジア西南部原産、13世紀にイランより中國に傳來。

	河北	山東	山西	河南	青海	新疆	貴州	湖北	湖南	江西	江蘇	上海	浙江	福建	臺灣	廣東	合計
赤蘿蔔	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
紅蘿蔔	0	0	2	2	1	1	1	1	1	2	0	2	0	0	0	1	14
紅菜頭	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	1	2	8
胡蘿蔔	1	1	3	0	0	0	0	0	0	0	2	0	1	0	0	0	8
その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2

(注) 紅蘿蔔；“紅羅貝”（山西大同等）含む

胡蘿蔔；“胡老箇”（江蘇丹陽）含む

(3)クロザトウ 原料のサトウキビは中國原産という説あり。

	河北	山東	山西	河南	青海	新疆	貴州	湖北	湖南	江西	江蘇	上海	浙江	福建	臺灣	廣東	合計
赤糖	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2	1	1	0	5
赤砂糖	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	3	2	0	0	1	11
赤沙	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
紅糖	1	1	3	1	1	1	1	1	0	2	18	6	44	3	1	1	85
黃糖	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	8	1	0	27	38
黑糖	0	0	6	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8
烏糖	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	11	1	2	16
青糖	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
片糖	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	13	15
沙糖	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	21	0	0	0	21

(注) 烏糖；“烏沙糖”（浙江浦江）含む

れば、邵武方言などは、かなりの程度“赤”が残存していることが豫測できるのである。ただ、今回は日本國內で調査がしやすい臺灣方言を重點的に調査することにした。

4. 臺灣方言の色彩語彙體系

4.1. 調査方法

調査は95年3月と、96年6月から7月にかけて行なった。インフォーマント總数は9名、全て20～30代の臺灣出身の在京の留學生である⁽⁸⁾。

調査は、次のような方法と手順に従った。

(1)典型的な色彩語彙と思うものを答えてもらう。すなわち反應が速く、容易に頭に描くことができる心理的に顯著な語彙を調べる（B&Kの基準④）。

(2)カード形の色票を順不同に提示して、それぞれの色名を答えてもらい、語彙を抽出する。使用した色票は、『テスト・カラー 110 色帖』（日本色彩株式會社）を8×5cmの大きさのカードに貼ったものである。

(3)マンセル體系⁽⁹⁾の色見本（『マンセル・カラー・システム デラックス』日本色彩株式會社）⁽¹⁰⁾の上へ、主要な色彩語彙の指示範圍を表示してもらう。この色見本

は色票を張り付けた板40枚からなり、1枚が1色相で、それぞれ明度と彩度の二つの軸で構成され、色票の一覧表のようにになっている。この表の上に透明なビニールシートを置いて、その上に油性ペンで範囲を描いてもらった。その際、MacLaury 1991の調査方法に倣い、第一印象の範囲、および敢えて擴大できる範囲の2段階で示してもらった。

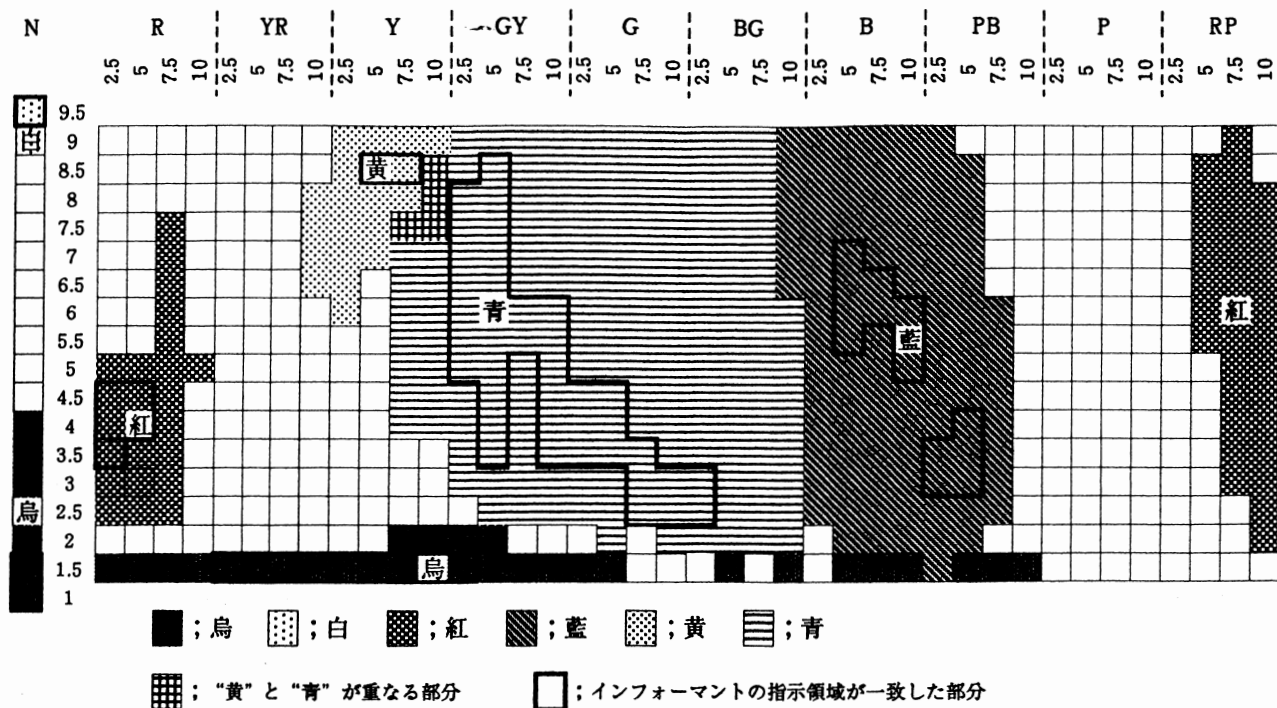
(4)色彩語彙の自由度調査。各色彩語彙がどのような統語環境で現れるかという、形態素の自由度に関する調査である。色彩語彙は形容詞に分類されることが多いので、主に形容詞の特徴に関する項目を設けた(楊 1991: 239-249)。すなわち、“色”が附加する場合(①)、連體修飾語となるか(②③)・副詞の修飾を受けるか(④~⑦)・重ね型を作るか(⑧⑨)、標準語の‘是~的’構文に相当するもの(⑩)、“有”を用いた表現とその否定(⑪⑫)である。これらの環境でのそれぞれの語彙の受容度を、「○」(最も自然なもの)・「△」(不自然だが受容可能)・「×」(不自然なもの)の3段階の記號でインフォーマントに回答してもらった。なお、この調査のみ調査表を郵送して行ない、8名の方から回答があった。

上記の調査(2)は2名に對して行ない、(1)及び(3)については3名(内2名は(2)のインフォーマントと同一)に對して行なった。これはBCTとそれに準ずる語彙を記述できれば良いからであり、多種の色彩語彙を記述するのが目的ではないためである。

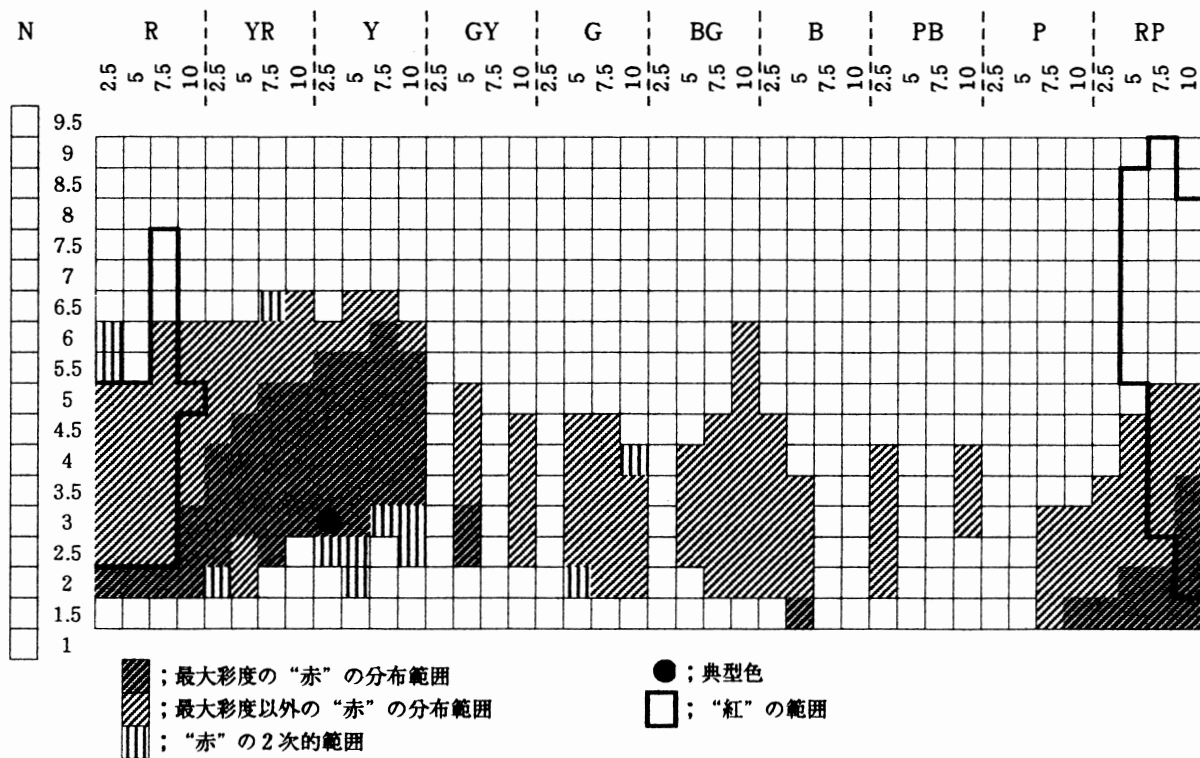
4.2. 結果

(3)については、圖1・圖2・圖3に表示した。まず、圖1はB&K 1969に倣い、BCTの最大彩度の領域だけを表示した。これは、3名のインフォーマントの指示した領域の總和、すなわち最大領域と、全員が一致した領域、すなわち最小領域(太枠で指示)を圖示してある。圖2・圖3はインフォーマント個人の“赤”の範囲を圖示したものである。これは、最大彩度の領域とそれ以外の彩度の領域を、パターンを區別して表示した。また、(4)は表4にまとめた。これは「○」を2點、「△」を1點、「×」を0點として集計し、自由度を數値化して表示したものである。數値が高いほど自由度も高いということになる。

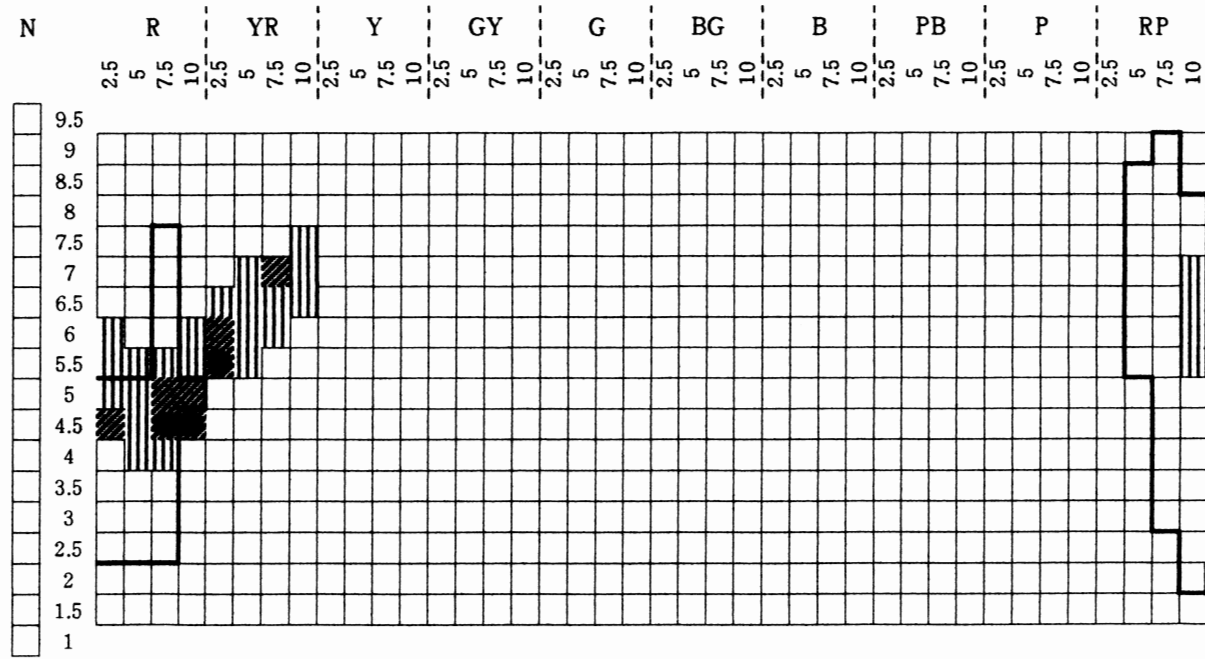
【圖1】 臺灣方言色彩語彙の指示領域



【圖2】“赤”の指示領域（吳小美氏）



【圖3】“赤”の指示領域（劉麟玉氏）



4.2.1. 臺灣方言の BCT

臺灣方言の BCT は“烏(o`1)・白(peh 8)・紅(ang 5)・藍(na 5)・黃(ng 5)・青(chhi`1)”である(音聲表記は基本的に教會ローマ字表記に準ずる)。北方方言との関連でいえば, “烏”は“黒”に, “青”は“緑”にほぼ相當する。これら6語は, より多くの統語環境に現れる。合計點數も, 約140~190の間に分布しており, 自由度は高い(表4)。因みに, この BCT 體系は B&K のコード化序列の第5段階に相當し, 第7段階の北京方言よりも早い段階に位置している。

一方“赤(chhiah 4)・紫(chi 2)・緑(lek 8)”などは, (1)の調査では後の方に現れるか, 現れないこともある。特に“赤”“緑”は, 理解語彙ではあっても使用語彙ではない場合が多い。これらは合計點數が85以下になり, 自由度が格段に落ちてかなり拘束的な方に傾いているといえる(表4)。

4.2.2. 臺灣方言の“赤(chhiah 4)”

指示領域調査では, インフォーマント3名のうち1名は指示領域を示すことはできないとした。指示領域を示したインフォーマント間でもかなり差があった(圖2・3)。これは, “赤”は BCT であるどころか, 自由度も他の BCT と比べて著しく低く, 既に拘束的になっており, そのためインフォーマントもその指示領域を判断しかねたのではないかと考えらる⁴⁰。ただし, 兩者の指示範圍は, 面積や彩度がやや異なるものの, 重なる部分も少なくなく, “赤”の指示領域について一定の傾向を示しているといえよう。また, 本稿で問題にしているのは, “赤”の指示領域を確定することではなく, 臺灣方言における“赤”の指示領域から, 以下に述べる中國語史における“赤”の變遷を類推することに有るので, ここでは取り敢えず, これ以上の言及は控えたい。

指示領域については, 痕跡的であるが, 當初の豫測のとおり“紅”の周邊領域に分布している。この“赤”は, 最大彩度に固定され色相と明度の二つの軸から成る二次元空間において“紅”の周邊に分布しているだけでなく, これらに彩度軸を加えた3次元的な分布を示してる。つまり, “紅”の下, 彩度が低くなる部分に潛り込むように分布しているのである。このことから, 色彩空間のカテゴリー化については, B&K 1969 が示したような色相と明度だけの2次元的な分析では, 十分でないことが指摘できる。また, 自由度にしても, “紫”“緑”など, 北方方言で BCT となっているような語彙より高いことは,

【表4】 臺灣方言色彩語彙の自由度

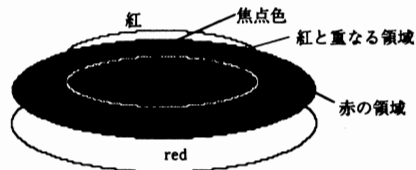
環境	烏 o'1	白 peh8	紅 ang5	藍 na5	黃 ng5	青 chhi'1	赤 chhiah4	紫 chi2	綠 lek8	茄仔 kio5a2	柑仔 kamla2
① _ sek4 (_ 色)	16	16	16	16	16	16	11	13	11	16	15
② _ choa2 (_ 紙)	14	16	16	9	11	10	1	1	1	1	1
③ _ e5 choa2 (_ 的紙)	15	15	15	13	15	16	4	5	4	2	1
④ chin1 _ (真 _)	16	16	16	11	16	15	5	4	6	2	1
⑤ siong7 _ (上 _)	16	16	16	13	16	16	8	9	5	3	3
⑥ siu'1 _ (傷 _)	16	16	16	14	16	16	12	8	7	3	2
⑦ khah4 _ (較 _)	16	16	16	14	16	16	13	9	7	1	1
⑧ _ _ <重疊>	16	16	16	6	16	16	9	5	4	0	0
⑨ _ _ _ <重疊>	16	16	16	9	14	15	9	4	3	1	1
⑩ Hit4 tiu'1 choa2si7 _ e5. (<input type="checkbox"/> 張紙是 _ 的)	16	16	16	14	16	16	7	9	6	1	1
⑪ Chit4 tiu'1 choa2 u7 _ (<input type="checkbox"/> 張紙有 _)	13	15	13	10	14	11	3	5	5	1	1
⑫ Chit4 tiu'1 choa2 bo5 _ (<input type="checkbox"/> 張紙無 _)	16	16	15	10	14	12	3	3	4	1	0
合計	186	190	187	139	180	175	85	75	63	32	27

この語が自由な単位としての痕跡を持っていることを物語っていよう。

5. “赤”の變遷類推

まず，“赤”はかつては red を指示した。やがて，“赤”の領域の一部を“紅”が指示するようになる。現在の“紅”の焦点や指示領域を考えると、それは恐らく“赤”の焦点と重なる部分ではないかと思われる。そして“赤”の上に“紅”の領域が次第に広がってゆき、結果的に“紅”の周縁に“赤”の領域が残ることになる¹²。これは臺灣方言などに見られる，brown に相當する領域である。また，red カテゴリーは層を成したこれら二つの語によって言及され，場合によって，そのどちらかを選択できる状況が生まれるともいえよう。MacLaury 1991 に従っていえば，このような選擇は話者の好み (preference) によって行なわれる。これは日本語の「アオ」と「ミドリ」の関係にも似ている。そして最終的に後發の“紅”が残り，“赤”は淘汰され，北方方言をはじめとした多くの方言でその指示領域が消えることになる。この指示領域の變遷は自由度とも関係するだろう。つまり，“赤”が淘汰されて行く過程で，その自由度も下降して行き，ついには成語や熟語のような固定した環境でのみ現れるようになるのである。

また，方言地理學的視點から見ると，北方方言ではほとんど消えている“赤”が，南方方言，それも吳語・閩



【圖4】“赤”と“紅”の関係模式圖

語にまだ散見できることから，“赤”の淘汰は主に北方で始まり，それがやがて南方に波及して來た。そして，その變化が最も遅いのは閩語である。

なお，橋本萬太郎氏は“赤”に付いて「はだかの肌の色から來たたとえの色名で，funj とは性格がことなる。(中略) 陽にやけた肌の色，はげ山，ぶた肉の赤身，牛，犬などが」“赤”に屬すると述べている (『客家語基礎語彙集』p. 85)。つまり，“赤肉”¹³ “赤牛” “赤狗”などの“赤”は比喩的轉用である。しかし，これは次のような可能性も考えられる。まず(1) “青”について “青山” “青衣”という語があるように，古代からの“赤”が拘束的な構成成分として複合語の中に殘存していること，(2) 南方方言では“赤”が比較的殘存しているため，そ

の指示領域の色（例えば茶褐色）と対象物の色（肉や牛の色）の共通性に動機付けられて複合語の修飾成分として用いていること、(3)單に辯別標識として“赤”を用いていること、などである。(2)と(3)が複合していることも考えられる。勿論橋本説は客家語内部に限られた説明であるが、“赤”という色彩語彙が南方方言に廣く残存していることを考えると、やはり上述のように色彩語彙として説明した方が分かりやすいのではないだろうか。

6. おわりに

本稿は日本中國語學會第46回全國大會での発表をまとめたものである。本稿を仕上げるに当たり、多くの方々にお世話になった。まず、調査にご協力頂いたインフォーマントの方は次のとおりである。氏名・性別・調査時の年齢・出身の順。

林國益氏（男31歳 台中縣）・蕭燦堂氏（男30歳 台北縣）・劉麟玉氏（女29歳 屏東）・張英素氏（女29歳 高雄市）・劉懿珍氏（女29歳 台北市）・陳宏傑氏（男26歳 台中縣）・許夏珮氏（女25歳 台北縣）・吳小美氏（女24歳 南投）・游能睿氏（男24歳 台北市）（年齢順）

以上の方々には、多忙の中、無報酬で協力を仰ぐ結果となった。特に、劉麟玉氏、陳宏傑氏、吳小美氏には、忍耐力が必要な面接調査にご協力頂いた。ここにお名前を記し、感謝の気持ちとしたい。

内容については、荒川清秀先生、遠藤光暁先生、古屋昭弘先生、また漢語史研究會及び東京意味論俱樂部の諸先生諸同學から勵ましと貴重な御意見を賜った。心から感謝申し上げたい。なお、投稿期日の関係で、頂戴した御意見全てを内容に反映させることはできなかった。特に、アズキ・ニンジン・クロザトウに見られる色彩語彙の選擇と、これら農産物の地理的、歴史的、社會的關連については、かなり複雑な問題も絡みそうであるため、稿を改めて論じたいと考えている。また、その他の方言についても調査を行ないたいと考えている。（1996. 11. 1）

【参考文献】

Berlin, Brent. and Paul Kay 1969 *Basic Color Terms: Their Universality and Evolution*. Berkeley: University of California Press.

遠藤雅裕 1994a「古代中國語の色彩語彙」『中國語學』241: 126-136

——1994b「北方官話の色彩語彙體系」『中國文學研究』20: 31-45

——1994c「粵語廣州方言の色彩語彙體系(試論)」『中國語學研究 開篇』12: 131-140

Kay, Paul 1975 Synchronic variability and diachronic change in basic color terms. *Language in Society* 4(3): 257-270.

國弘哲彌 1979「アカミソは〈赤い〉か?」『言語』8-5: 8-12

MacLaury, Robert E. 1991 Social and cognitive motivations of change: Measuring variability in color semantics. *Language* 67(1): 34-62.

大村敬一 1996「環境を読む鍵としての色彩—カナダ・イスラエルの色彩語彙と色彩カテゴリーに関する試論—」『北海道立北方民族博物館研究紀要』5: 5-45

鈴木孝夫 1990『外國語と日本語』岩波書店

楊秀芳 1991『臺灣閩南語語法稿』大安出版社

吉村公宏 1995『認知意味論の方法—経験と動機の言語學』人文書院

【資料】 出版年順(編著者・出版機關省略)

客家語基礎語彙集(1972)・福建漢語方言基礎彙集(1979)・煙台方言報告(1982)・浙南吳語基礎語彙集(1983)・昌黎方言志(1984)・大同方言志(1986)・李莊方言記(1987)・珠江三角洲方言詞匯對照(1988)・上海市區方言志(1988)・獲嘉方言研究(1989)・晉語平遙方言分類語匯(1990)・中陽縣方言志(1990)・湖南婁底方言詞匯(三)(方言 1990-3)・利津方言志(1990)・大關方言志(1990)・汕頭方言詞匯(方言 1991-3)・閩語研究(1991)・臺灣話大詞典(1991)・桐廬方言志(1992)・漳平方言研究(1992)・當代吳語研究(1992)・浙江方言詞(1992)・江永方言研究(1993)・福清方言研究(1993)・博山方言研究(1993)・常州方言詞匯(一)(二)(1993松山大學論集 5-4~5)・洛陽方言研究(1993)・舟山方言研究(1993)・臺灣閩南方言記略(1993)・嘉定方言研究(1993)・廈門方言詞典(1993)・蘇州方言詞典(1993)・崇明方言詞典(1993)・太原方言詞典(1994)・西寧方言詞典(1994)・貴陽方言詞典(1994)・湖南安仁方言詞匯(三)(方言 1995-4)・忻州方言詞典(1995)・烏魯木齊方言詞典(1995)・武漢方言詞典(1995)・南昌方言詞典(1995)・黎川方言詞典(1995)・丹陽方言詞典(1995)・梅縣方言詞典(1995)・南京方言詞典(1995)・漢語方言詞匯(第2版)(1995)

【注】

- (1) 本稿では、色彩語彙の指示カテゴリーを、便宜的に英語で表記する。
- (2) カテゴリーのプロトタイプ論(例えば吉村 1995: 55)によると、それぞれの事例のカテゴリーへの歸屬の度合には傾度がある。つまり、典型的な事例から非典型的な事例まで連続しているのである。このことは、言語學的分類についても當てはまる。例えば、ある形態素のある環境に對する現れ方で、その制限が緩いものを自由形態素、一定の結び付きしか許されないものを拘束形態素という。しかし、この自由と拘束の間には無限の段階があって、それぞれの形態素はその間の

どこかに位置しており、自由・拘束の二項対立だけで割り切れるものではない。よって、本稿では形態素の「自由度」という術語を用い、様々な環境に現れることを「自由度が高い」、その逆を「自由度が低い」と表現する。

- (3) これらの資料に基づいて、口語層の“青”の指示領域を確認する作業は簡単ではない。例えば『太原方言詞典』・『西寧方言詞典』などでは、‘藍色或綠色’という意味記述のあとに、“青天”“青山綠水”などの用例を挙げている。この用例の“青”は複合語の構成成分であり、拘束的であると判断できる。他の北方方言の例をも勘案すれば、これらの方言で“藍色”や“綠色”を指示するのは、拘束的な場合に限られるのではないかと考えられる。また、温州方言の“青”について、『浙南吳語基礎語彙集』では「color of nature—green, blue, black」(p. 694)と、かなり広い領域を指示しているように記述されているが、『漢語方言詞匯（第2版）』(p. 493)では主として布や糸の黒い色を指すというように、指示対象が制限されているような記述がある。
- (4) 基本レベルカテゴリー (Basic Level Category) は、(1)名前をすぐに答えられるなど事例反応が速い、(2)連想が簡単、(3)外見の類似、(4)言語表現が簡潔といった特徴を備えている (吉村 1995: 63)。B&K 1969 の BCT とは、この基本レベルカテゴリーのことである。この基本レベルカテゴリーを中心にして、上位には上位カテゴリー (Superordinate Category) が、下位には下位カテゴリー (Subordinate Category) が位置し、カテゴリー階層をなしている。本稿では、便宜的に、基本レベルへの移行を「前景化」、基本レベルから上位レベルへの移行を「背景化」と呼ぶことにする。
- (5) ‘赤伾赤’という反復疑問文を作ることができる (『閩語研究』p. 360)。つまり、自由度がかなり高いことが豫想できる。なお、邵武方言は客贛語に属すが、閩語の特色も持っている (前掲書 p. 341)。
- (6) “紅豆”は「トウアズキ」，“小豆”は“赤豆”ともいい「アズキ」のことで、植物學的分類では別のものである。しかし、参照した方言資料では、当該の語がどちらを指示しているのか明示されていない場合も多い。また、南京方言のように“紅豆”と“赤豆”が同じ「アズキ」を指す場合もある (『南京方言詞典』p. 299)。そこで、便宜的に“紅豆”と“小豆”を、アズキおよびそれに類似する豆類の名稱として処理しておく。
- (7) 例えば、日本語の「クロザトウ」は未精製の砂糖を指すが、それは語構成上、色という属性によってシロザトウと區別されている。この場合の「クロ」「シロ」という構成成分は、実際の指示対象の色を正確に描寫しているのでもなく、また焦點色を指示しているのでもない。むしろ、「クロ」「シロ」は、その焦點が異なるが故に生ずる對立が明確なために、砂糖を區別する辨別標識として機能しているのである。これは、誤解が生じない限り簡略な表現を用いようとする人間の「勞力節約の習性」によるものである (國弘 1979: 10)。このクロザトウをアカザトウともいえるのは、それをシロザトウと區別することが重要であるからであ

り、対象の属性を正確に描寫することではないからである。つまり“白糖”と區別できれば、“紅糖”でも“黒糖”“赤糖”でもよいのである。しかし、この修飾成分の選擇は、全く任意というわけではなく、対象物の属性に動機付けられているわけである。

- (8) 調査対象は若年者であり、標準語（國語）の影響が大きいため、高齢者を調査すべきとの指摘もある。しかし、一方で高齢者は日本語の影響が懸念される。また、大陸の若年者も標準語の影響が大きい點を考慮すれば、やはり理想としては、邵武などの、大陸の高齢者を対象にすべきであろう。ただ、臺灣が40年以上大陸と隔絶し、閩語臺灣方言を母語とする人が四分の三程度を占めていることを考えると、若年者を調査対象にした場合でも、有意義な結果は得られると思われる。
- (9) マンセル體系は、色相・明度・彩度の3つの軸からなる色彩體系である。色相とはスペクトルの違い、明度は明るさ、彩度は鮮やかさのことである。
- (10) 色見本は、早稻田大學人間科學部の畏友大村敬一氏より貸與されたものを使わせていただいた。心より感謝申し上げたい。
- (11) 圖2のほぼGYからPBにかけての領域について、インフォーマントは“赤土”の色を連想すると答えた。つまり、この領域については“赤土”の實際の色から“赤”の領域を推定したものである。
- (12) 同様の過程は、カナダのイスイットの色相カテゴリーにも見られる（大村 1996: 34-35）。
- (13) “瘦肉”（肉の赤身）を“赤”あるいは“赤肉”という例は浙江から福建・廣東の吳語・閩語・客家語に見られる。